

れども、常はかやうたるべし、別足のおもむきをまいらせば、下はしを可獻つてみたるすがた。
○略下はおしき也、つゝみたるはこうぱいだんし、かいしきの葉はなんてんぢく也、やき物にも尊者には別足の面向をまいらせて、上はしにても下はしにても、一のこすべき也、猶口傳あり、一別足つゝみて三十三刀ニ切様、口傳在之、鳥左をもむきに當也、但切事、外ニ十七刀、内ニ十三刀、上ニ三刀、少すちかへて切べし、以上三十三刀なり、

〔北山抄三拾遺雜抄〕新任饗

延長八年正月四日立作所進雉小燒荒蠣等、

〔定家朝臣記〕康平三年七月十七日癸卯酉刻節會○任大臣節會、實爲內大臣中略、以藤原大饗料理次第 納言以下

○中略三獻飯次 小鳥燒物

〔古事談二臣節〕九條民部卿顯賴弁官之時有公事之日、早旦參陣漸及深更之間已臨飢、仍於床子座喚色示其由了、頃之雜色黑器物ト云物ニミソウヅノ毛立タル一盃ト、薯蕷ノ燒タル二筋トヲ持來テ與之云々、黒器物ヲバヒキソバメテ皆啜クヒテ只今ゾ人心地スルトテ、イモヲバワトノヨソヘトテ授師光大外記云々、

〔料理物語燒物〕やき竹の子、竹のこのふしをぬき、中へかまぼこ玉ごまろにして入、かわともにやきてきり候、かまぼこの鹽すこしからめにしてよし、

〔倭名類聚抄十六魚鳥〕魚

禮記注云、魚豆豆々三夜木、名裏燒也、

〔箋注倭名類聚抄四魚鳥〕禮運注、燒下有之字、按說文、炮毛炙肉也、毛傳義同、鄭意、毛謂燎毛、炮謂裏燒、

不與毛詩同、

〔類聚名義抄四魚〕魚亦炮字、ツ、ミヤキ

炮音庖、ツ、ミヤキ、
アブル、ミヤキ、